

かけはし～足りなかった1票から考えよう～第59号

1月21日にアメリカ野球殿堂入り表彰者が発表され、メジャーリーグ通算3089安打などの輝かしい実績を残されたイチローさんが日本人で初めて選出されました。野球殿堂入りには全米野球記者協会に10年以上在籍する記者の75%以上の得票が必要となります。今年は394人の記者が投票し、イチローさんは393票を獲得しました。つまり、イチローさんに投票しなかった記者はたった1人だったということです。ちなみに過去に満票での選出はマリアノ・リベラ投手お一人です。たった1票なので、「惜しかったな」「残念だったな」との気持ちになってしまう人が多いと思うのですが、イチローさんは残念がる様子もなく「1票足りないのはすごくよかった。自分なりの完璧を追い求めて進んでいくのが人生。不完全であるというのはいいなあ。だから進もうとできるわけで。そういうことを改めて考えさせられるというか、向き合えるというのはよかったな」と語られたそうです。現在51歳のイチローさんは足りなかった1票を『不足』ではなく『伸びしろ』ととらえておられるようです。このような感覚で自分や子どもを観ることができると価値観も広がり素敵だと思いますが、なかなかできない考え方だとも思います。自分なりの完璧を追い求めて進んでこられたイチローさんはオリックス時代、ナイター後に食事をしてからの打撃練習とウェイトトレーニングを欠かさなかったそうで、引退した今もトレーニングを続けておられるそうです。一緒にプレーをした田口壮さんは一度やると決めたことを継続する意志の強さは10代の頃から並外れていたと語っておられます。自分なりの考え方や価値観を持つためには、自信の基盤となる努力が必要なのかと考えさせられるエピソードだと思います。私たちは学校教育法第9条に研究と修養に励まなければならいと明記されており、法定研修が全体練習、選択研修が自主練習に当たると考えます。様々な研修を重ねることで自信や結果につながればいいですね。また、子どもたちも努力を続けることを大切にしたいです。努力を続けるヒントとして「感謝を伝えたい人は」との質問に対して「まずは妻。ずっと一緒に戦ってくれて支えてくれた存在」と答えられたエピソードを紹介します。ロシアの心理学者ヴィゴツキーが提唱する「身近な他者の的確なサポート・援助こそが、成功の鍵になる」との教育論とも重なり、弓子さんからの適切なサポート・援助がイチローさんの支えであったことが想像できます。サポートは過剰でも過少でもダメで、適度なサポートを心掛けなければならないのは分かっているのですが、匙加減は難しいです。



殿堂入りが発表されて数日後にニューヨークにある殿堂博物館を訪れたイチローさんはインタビューに対して「1人投票してくれなかった方がいる。自宅に招待して一緒にお酒を飲みたい。名乗り出てシアトルまでお越しください」と話し、笑いを誘ったそうです。ユーモアな面も披露されたイチローさんですら「アメリカでマイノリティーの立場で勝負するタフさは」との質問には「なかなか表現しづらい。できれば本音で話したいし、薄い話をしたくない。薄いのが自分の心からの言葉ならいいが、この質問に関しては、それはできない」と語られました。偉大な記録を残されたイチローさんですら、様々な壁を乗り越えなければならなかったようです。イチローさんの偉大な記録とその歩みから何か参考にしてみませんか。 人権・地域教育課